■コメント

歴史地理学　61－1（291）132-135　2019. 1

海浜の活用の状況と研究の視点

―橋村修報告・品田光春報告によせて―

磯　部　　作

はじめに

周囲を海に囲まれた日本では，海の活用はもちろんのこと，海浜も様々に活用されてきた。海は「磯は地付き，沖は入会」とされ，明治漁業法以後も基本的にはそれを踏襲してきた。このため海浜は基本的には沿岸の地域住民が活用してきたが，近世から近代にかけて以後，多方面の利用がなされるようになっていった。

ここでは，「近世～近代における海浜の活用」のセッションで，近世末からの観光での活用を取り上げた橋村修報告と，近代以後の油田開発を取り上げた品田光春報告に対して行ったコメントをまとめる。

まず，海浜の状態について簡単にまとめるとともに，海浜の活用と海浜の改変活用について現代までも見通して概観した後，海浜活用の調査研究の視点をあげ，両報告についてのコメントとしてまとめる。

１．海浜の状態

海浜とは，高潮線と低潮線の間の海岸のことであるが，橋村修報告が海岸景観などを，品田光春報告が沿岸海域を対象にしているため，ここでは，これらの地域や海域を含めて，海浜をより広く捉えることにする。

海岸は，自然海岸と人工海岸，それに半自然海岸に大別される。このため海浜も同様な区分ができる。自然海浜は自然のままの海浜であり，砂浜と磯浜に大別される。これに対して，人工の海浜には，干拓による石垣護岸や埋立てによるコンクリートの垂直護岸，それに人工的に造成された砂浜である人工海浜などがある。また，自然の海浜の陸側に堤防などが設置されているのが半自然の海浜である。

近世から近代にかけては，東京湾や大阪湾などの内湾においても，まだその大部分が自然海浜であったが，一部に人工海浜などもみられている。それは，農地造成のための干拓や塩田造成や港湾建設などによる石垣護岸などである。干拓による人工海浜は，岡山県の児島湾などにおいて造られており，入浜式塩田などの塩田造成による人工海浜は，瀬戸内海沿岸などで造られている。港湾の岸壁などの人工海浜としては，備後の鞆，備前の下津井など，北前船などが寄港する港などで造られている。

２．自然海浜の活用

自然海浜の活用形態をみると，漁業では，砂浜は，採貝や採藻，地曳網，海藻や漁網の干場，漁船の保管場所などに活用され，磯浜は，採貝や採藻，釣りなどに活用されてきた。

祭事としての活用は，神輿の浜下りなどが行われており，愛知県知多郡豊浜の鯛祭りでは，鯛の張りぼてを浜から海に担ぎ込んでいる。

美しい景観の海浜は，名所となっている所も多く，日本三景の厳島，天橋立，松島はすべて海浜の景観である。美しい海浜の景観

は，国立公園や国定公園などとして指定されてきており，国立公園としての指定は1934（昭和９）年以降であるが，現在，34ある日本の国立公園のうち19が海の景観か，海の景観を含んでおり，その大部分は，海浜の美しい景観を中心にしている。

観光としての海浜の活用は，海浜の美しい景観を眺めることであり，砂浜景観では瀬戸内海の白砂青松や京都の天橋立など，磯浜景観では，宮城県の松島や福井県の東尋坊などがあげられる。海浜の景観は，陸側から眺めることが多かったが，遊覧船などの船で海側から眺めることも行われている。なお，観光として活用される海浜の美しい景観の中には，漁村風景などの人文景観もある。

レジャーやレクリエーションとしての海浜の活用としては，砂浜では，近代の1880年代以降，海水浴が行われていく。愛知県の大野や野間，神奈川県の大磯，千葉県の稲毛，大阪府の浜寺，岡山県の沙美などの砂浜は海水浴場として有名になった。また，干満の差の大きい太平洋側や瀬戸内海などの干潟では，潮干狩りが行われている。さらに海浜は，カヌーやボートやヨットなどの船舶を使用した活用も行われ，近年ではプレジャーボートや水上バイクなどによる活用，スキュ―バーダイビングなどによる活用も行われている。

遊漁としての活用では釣りが多く，磯浜での磯釣り，波止での波止釣り，砂浜での投げ釣りなどが行われている。

近年では，学習・教育的な体験型の漁業体験や漁村体験や観光漁業なども行われている。瀬戸内海や伊勢湾などでは小型機船底曳網体験などが行われ，沖縄県ではサンゴ礁などでの漁業体験などが行われている。

３．海浜の改変活用

海浜を改変して活用することは，近世においても，塩田や農業干拓，港湾建設，鉱業としては，砂浜での採砂などが行われ，磯浜では採石などが行われてきたが，近代以降，とりわけ現代では，海浜を大規模に改変して活用することが行われている。

塩田としては，砂浜や遠浅の海を活用しており，近世末頃から，岡山県の野崎浜などの大規模な入浜式塩田が造成され，さらに戦後は流下式塩田へとその形態が変化してきたが，1972年には製塩はイオン交換樹脂膜法となり塩田は廃止され，現在では，観光用の塩田がある程度である。

農業用の干拓は，近世にも備前藩の児島湾の沖新田などの大規模な新田開発が行われることがあったが，近代以降になるとさらに大規模な干拓が推進され，戦後は，児島湾や八郎潟などで，複式の非常に大規模な干拓が行われている。

また，港湾としては，漁港や商港などとして入江や湾などが良港とされて活用されてきたが，近代になると，横浜港や神戸港などの貿易港が建設され，戦後の高度経済成長期には，三重県の四日市港や岡山県の水島港などの大規模な工業港が，海浜や浅海域の土砂の浚渫によって建設されていった。また，北海道の苫小牧港や茨城県の鹿島港などでは，砂浜を掘り込む掘り込み式の港湾が建設されている。そして，港湾の防波堤や岸壁は，石造りからコンクリートの垂直護岸になっている。

鉱業では，近代以降，砂浜での採砂や磯浜での採石も行われるが，新たに，東北などの日本海における海底も含む石油採掘，九州や山口における海底炭鉱の掘削などが行われていった。

海浜の埋立ては近世においても，江戸や大坂などで行われているが，海浜を大規模に改変したのは，近代以降の工業用地造成のための埋立てであった。工業用地造成のための埋立ては近代以降まず東京湾や大阪湾などで行われるが，最も大きく海浜を改変したのは，高度経済成長期を中心に盛んに行われた重化学工場を立地させるための臨海工業地帯造成

のための埋立てであった。それは，浅海を浚渫し，その浚渫土でもって埋め立てをし，さらに山土などを使用するものであり，東京湾の京浜工業地帯や京葉工業地帯，大阪湾の堺泉北臨海工業地帯，瀬戸内の岡山県の水島臨海工業地帯などで行われていった。

高度経済成長期後は，工業用地に代わって，都市開発用地造成や空港建設，コンテナ埠頭などの港湾建設などの埋立てが主に行われていった。これらは，航路筋の浚渫土砂などとともに，製鉄業の鉱滓などの産業廃棄物や，都市の一般廃棄物廃棄物による埋立てが多く，東京湾の夢の島や羽田空港，大阪湾の咲洲や関西国際空港，伊勢湾の中部国際空港など，人工島を造成する形式が多く，新たな人工海浜も形成されたのである。

これらの海浜の改変活用は，立地した大企業などに経済的な効果をもたらしたが，一方で，埋め立てなどにより自然海浜が消失して，千葉県の稲毛や大阪府の浜寺などの海水浴場が消滅するなど，海浜の景観や環境が破壊され，工場排水による汚染などの公害問題が発生し，景観を含む環境保全が重大な課題になっていったのである。

４．海浜の活用についての研究の視点

以上のような海浜の活用の状況において，海浜の活用について調査研究をしていく場合には，海浜の自然的・社会的な特色である地域性を考慮し，海浜の活用の具体的な内容，海浜の活用の歴史的・地域的な展開の状況や経緯を明らかにするとともに，海浜の活用の地域の環境や社会に対する影響，社会全体への影響，さらに海浜の活用によって生じる地域問題とそれへの対応や解決などを取り上げて調査研究をしていくことが重要である。

海浜の自然環境を活かして行われる漁業や祭事は，基本的には地域住民によって行われるが，有名な祭事になると地域外からの見物客も多くなるため，その状況なども調査研究されなければならない。

海浜を活用して行われる遊漁や観光・レクリエーションは，基本的には海浜に来る外来者を対象にしたものであり，その内容や状況，それを受け入れる地域の対応，それによる地域の変化，さらに，社会全体への影響などについて調査研究をすることが重要である。

海浜を改変して活用する鉱業や港湾建設，工業などについては，海浜の開発行為などの状況と経緯，雇用や経済効果などとともに，その産業による地域への影響，社会全体の経済発展への影響，さらに，大規模な掘削や浚渫，それに埋立てなどの開発行為による海浜の改変状況と，それによる地域の環境の変化や環境破壊の問題などについて，調査研究をする必要がある。

５．橋村修報告・品田光春報告について

橋村修報告「近世以降の海辺の多様な利用―「遊漁」「海の名所」をめぐる歴史的展開―」，品田光春報告「近代日本の油田開発における海浜・海底」ともに，非常に有意義な研究である。

橋村報告は，「海の歴史地理的な研究は経済的な視点（漁業・海運）に重きがおかれてきた」と指摘し，「海辺浜辺の利用や風景（空間）認識について『遊漁』『祭事』（『文化遺産』）をキーワードにして取り上げ」ており，これまで取り上げていなかった視点からの研究で，海辺の活用や風景認識について，近世の遊漁や海の名所，漁業・漁村景観，祭事などを，多くの浮世絵や地誌書などから考察している。さらに現代における海辺祭事や伝統漁法が観光対象となることも示している。そこでは，海辺の活用を，自然景観と人文景観をともに重視して考察している。海浜の活用は，前近代から漁業だけでなく多様に行われてきていただけに，このような研究は非常に重要であると言える。ただ，遊漁などにおいても，それが行われる社会経済的な背景や，

それが行われることによる社会経済的な影響などがあるため，それらについても考察していただきたい。

品田報告は，「明治から昭和期にかけての国内油田開発において，海浜・海底の石油資源が，鉱業者によっていかに認識され，開発されてきたか」を，「国内初の海底油田開発である1888（明治21）年の日本石油による尼瀬油田（新潟県出雲崎町）の事例を中心に考察している。日本の油田開発史における海浜・海底に触れた後，明治期における尼瀬油田の開発史をまとめ，尼瀬油田の鉱業景観と開発の実態と，衰退した町の一時的な活性化や漁業への影響などの油田開発が地元にもたらした影響を明らかにしており，「海洋が油田開発の場になりうると全国の鉱業者に認識される結果になったのではないか」と指摘している。資料や古地図，古写真などによる実証的な研究であり，研究の位置づけや方向性も示されており，貴重な研究である。石油採掘などの鉱業は，企業が略奪的に資源を採掘することも多いだけに，雇用などとともに環境などへの影響を取り上げることが重要である。また「海（から）の鉱業地理研究」を指摘されているだけに，今後，石油以外の事例も研究していただきたい。

6．おわりに

近世末から近代は，商業が発展し，資本主義社会が形成されてきた時代であり，観光や鉱業など，海浜が多様に活用されていったため，「近世～近代における海浜の活用」の実態，海浜の活用による地域や社会への影響，それにより発生する地域問題やその解決などについて，今後，研究がより進展していくことが需要である。

なお，1977年の第三次全国総合開発計画以降は，沿岸海域と沿岸陸域を合わせた「沿岸域」という捉え方もされており，また最近では，他地域で生産，消費された石油化学製品のプラスチックごみなどが海浜に大量に漂着して，海浜の景観を含む環境破壊が重大な問題になっていることもあるため，海浜の影響や問題をより広く捉えて研究していくことが求められるのである。

（放送大学・客員）

〔付記〕

『第61回歴史地理学会発表資料集』には，橋村報告，品田報告の概要が掲載されていなかったため，「」内の文章は，事前の打ち合わせに提出された資料より引用している。

〔参考文献〕

重見之雄『瀬戸内塩田の所有形態』大明堂，1993。

磯部　作「沿岸域の振興と景観管理」（脇田武光・石原照敏編『観光開発と地域振興』古今書院，1996），148-155頁。

磯部　作「多面的機能を活かした水産業・漁村地域体験の状況と漁業者の社会的貢献」（山尾政博・島秀典編『日本の漁村・水産業の多面的機能』北斗書房，2009），111-131頁。

磯部　作「倉敷市水島の現状と地域再生の課題」（『環境と公害』岩波書店，1999），26-31頁。